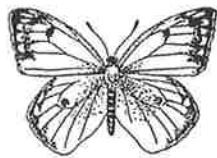


財団だより

多摩川

1990.3 第45号



モンキチョウ・春型(シロチョウ科)
メスには黄色と白の2つの型がある。
食草はミヤコグサ、レンゲソウ、コマツナギ。



二子玉川でのサケ放流会(平成2年2月18日)

■多摩川現風景■

(1) サケの放流会

多摩川の早春のイベントとしてすっかり定着してしまつたサケの放流式が、今年も2月18日曜日に二子玉川の川原で催された。世田谷区、東京にサケを呼ぶ会、読売新聞などの主催によるこの催しは、すでに10回目を迎え、今年は国際サケ会議も初めて東京で行なわれている。参加者7000人(新聞発表)、サケの稚魚10万匹が区内の児童や参加者によって放流され、4年後の回帰を願うという次第だ。この日は対岸の川崎市でも川崎サケっ子の会による放流式が行なわれていた。

現在、多摩川水系では5団体ぐらいが毎年サケを放流しているようだが、今まで66匹の回帰サケが確認されているそうで、時々捕獲のニュースが新聞にのっている。

カムバックサーモンの運動は、北海道の札幌市内を流れる豊平川での試みが昭和50年半ば頃大きな成果を挙げたことにより、全国に広がり始める。都市河川の再生を願うこの運動の主旨は、サケの放流を通じて川

に対する興味や意識の高揚を図ろうとするものだが、その成果は挙がっているのだろうか?一部の識者の間では川の生態系を乱すという意見や、本来の環境教育とは言えないという指摘もある。

多摩川は大正2年にすでに琵琶湖産のアユを放流した実績を持つ。アユやサケ以外にも移入された魚は多い。多摩川はいわば、魚相においてもすでに人工河川となつてしまった感がある。将来、次の世代にとって、このサケの放流式が多摩川の原風景となるのであろうか。

●関連する財団の研究助成 学術研究

- ①多摩川水系魚類の分布及び遊泳行動と水質との関連に関する研究
井上 実 1982年 (No45)
- ②多摩川水系魚類の餌料についての研究
杉浦 宏 1983年 (No59)
- ③多摩川水系における川漁の技法と習俗
安齋 忠雄 1983年 (No63)
- ④多摩川に生息する魚類の魚病相と再生産力に関する研究
日比谷 京 1984年 (No72)
- ⑤多摩川における魚類の生息環境と免疫学的研究
出口 吉昭 1989年 (No120)

多摩川散歩



菅の渡し・1970.9 筆者 撮

郷土史家 角田 益信

稲田堤の桜

南武線の稲田堤駅を下車して右に進むと多摩川の土手に出る。こゝは、かつて東京近郊の桜の名所として知られた稲田堤である。現在でも少し上流の堤には「多摩川稲田堤桜之碑」が建っている。

昭和5年に北原白秋が作詞した多摩川音頭の一節に「咲いた咲いたよ、稲田のさくら、時は世ざかり、時は世ざかり花ざかり」と歌われている。

戦前までは4月の日曜日には東京から何万という花見客がきてにぎわった。土手にはヨシズ張りの茶店が何十軒も出て酒、ビールをはじめ、桜羊羹、ゆで玉子、キヌカツギ、団子などを売っていた。花見客は土手下の貸し座敷で芸者を上げて騒いだり、忠臣蔵の四十七士や国定忠治などの仮装をしてくる人もいた。

昭和35年頃から、土手の上を自動車が行くようになり、排気ガスで桜は枯れ始めた。同43年に多摩川沿川道路ができて稲田堤の桜は切られた。

菅の渡し跡

京王相模原線の多摩川鉄橋のそばに「菅渡船場跡」の碑が建っている。こゝには川崎市の菅と対岸の調布を結ぶ菅の渡しがあった。

昔は東京へ肥引きに行ったり、対岸の畑へ耕作に行くのに通ったものである。また、秋になると梨や柿を神田市場へ出荷するにも利用された。こ

の渡しには馬船が2隻、伝馬船が1隻あって、船頭が2人でこいだ。そして、毎年12月1日より、翌年5月31日までは仮橋が架けられたのである。

大正頃は徒歩が1銭5厘、自転車が3銭、荷車が5銭、馬車が8銭した。戦前は徒歩が3銭、自転車が5銭、リヤカーが7銭になった。戦後は値上がりして、最後は徒歩が20円、自転車が25円、バイクが30円になった。

戦後、京王閣競輪の開催日には渡しを利用する人も多かったが、京王相模原線が開通してからは利用度も次第に減り、昭和48年6月に廃止した。

中野島の和唐紙

中野島付近は江戸時代から和唐紙の漉造が盛んであった。文化3年に神田白壁町の紙類商・中川儀右衛門は多摩川の水質のよいのに着眼し、江戸から地理的条件に適した中野島村の田村文平に和唐紙の製法を伝えた。これが玉川和唐紙の始まりである。

和唐紙というのは、中国製の唐紙を模造したもので長さ4尺、幅2尺である。原料は三桮を用い、当時は駿河の御殿場付近から馬背で運んだという。この紙は山水、花鳥などの模様を漉入れたもので書画家たちに使用された。そのほか、襖紙に用いられて江戸町民からも珍重されたという。

文政4年頃、田村鉄五郎国秀は四谷塩町1丁目に玉川堂と称する紙問屋を開業し、中野島で漉いた紙類を販売していた。明治頃に貿易が始まると、品質のよい和紙も輸出されて、同20年頃まで続いていたという。

案内図



私と多摩川



多摩川上流処理場・1989.12撮

元東京都多摩川上流処理場長 谷口尚弘

毎年、6月になると社会科教育の一環として、小学生達が処理場の見学にやってくる。子供達と下水道の話しを交わすのは実に楽しい。

「家で水洗トイレを使っている人は？」

「ハイ」と一斉に手が挙がる。

「トイレで流した水はどこへ行くと思う？」

「下水道だよ、

「エライ！、他には？」

「田んぼ」、「川にも流れて行くよ、

「さすがー！、どうやってそのことを知ったの？」

「家の前で工事やってたもん、

「先生が教えてくれた」、

「いつ？」

「昨日」

こんなやりとりをしながら、下水処理の説明をして、処理施設を見に行く。始めに処理場の入り口にあたる沈砂池。再び質問。

「今朝、トイレに行ったひとー？」

沢山の手があがる。流下してきた時間を計算すると、丁度到達した頃である。

「これ、多分君達が今朝流したものだよ、懐かしいとおもわない」

「エエー！ウッソー」

最後に多摩川に放流される処理水を見る。処理に要する時間から逆算すると、前の晩に使われた

水だ。

「夕べ、お風呂に入ったかい？」

「ウン、入った」

「これ、もとはみんなの頭や体、夕食の食器などを洗った水なんだよ」

「ホント、キレイになってる！」

子供達は好奇心に溢れている。当方の話しにも夢中になって、耳を傾けてくれる。

昔、といってもそう遠い過去ではないが、少なくとも戦前まで、多摩川流域の人々は取水と排水を自己完結させていた。

お年寄りの人達の話しによると、人々は生活用水を沢か井戸から汲み上げることによって手に入っていた。それは、大変辛い仕事であったということだ。水を沢山使えば、労働量はそれだけ増える。したがって、人々は水をムダなく大事に使っていた。一度だけでなく、何回も使用した。例えば、お風呂の残り湯は洗濯や堆肥、水撒きなどにお米のとき汁は食器洗い、家畜のエサ、床ふきなど、さらには庭木や堆肥などに撒水されたという。このように、排水も自宅の周辺で井戸や川を汚染させないように処分されていた。これらは生活の知恵として、代々受け継がれてきた。

ところが、世の中の近代化とともに生活領域が広がり、水道や下水道が引かれると、人々は用水や排水の重労働から解放された。それ自体は大変素晴らしいことであった。だが、その反面、人々の水への意識を急速に薄れさせる結果をもたらした。

水資源は有限であり、排水を受け入れる環境容量にも限界がある。時代は変わっても、生活の根源的要素である水についての意識は持ち続けたい。節度を忘れた時、より大きな問題がまた自分達に戻ってくるからである。

生徒達の処理場見学が少しでも水について意識したり、考えるキッカケになればと思う。子供達は素直である。見学で観察したこと、経験したことを両親にも話してくれたとしたら、彼らは先生の役割も果たしている。子供達の意識が大切な多摩川を守る大きな力になるよう期待したい。



水のない溪流と斜面に広がる住宅(鳩ノ巣1990. 2)

多摩川紀行

山道省三

④ 鳩ノ巣 ～ 川井 (4.2km)

昨年の10月10日、2回目の多摩川下りでは氷川から白丸ダムまでのカヌー行について紹介した。

カヌー下りは引き続き次の週の10月15日、鳩ノ巣溪谷の雲仙橋下から川井の町営川井キャンプ場までをすでに下っている。今回はその時の様子とあわせ、2月18日に青梅マラソンを見物がてら、同じコースを地上から歩いてみたのでご紹介したい。

鳩ノ巣は昔から溪谷の行楽地として知られ、大正12年の青梅鉄道の全線電化や昭和初の「日本百景」のうちに選ばれたりして御岳山とともに東京の奥座敷として親しまれてきた。

鳩ノ巣駅に降りるとすぐ下に青梅街道が通り、そのまま急傾斜で川底まで落ち込む。10月には、川原でバーベキューや釣りを楽しむ人が多かった。中年や老年の人が多いかと思っていたが、高校生や大学生のグループがほとんどなのが意外だ。

鳩ノ巣を出てすぐ新しい橋に出会う。地図(国土地理院1/25,000)にはまだ書かれていない橋だが、この2月に通ってみたら、昭和62年3月に完成した「鳩ノ巣大橋」となっている。多摩川沿いの道路は古里駅まで左岸を青梅街道、右岸を吉野街道が通っている。右岸については、吉野街道が古里で青梅街道に合流すると、その先は道がなくなっていたのだが、古里から鳩ノ巣まで道が開通しているようだ。

カヌー行は相変わらず水が少なく艇底を砂利や岩にこすりながらの川下りだったが、快適に下っていった。川沿いの急斜面の林の間に新しい民家や別荘風の家が見え隠れしはじめる。古里や川井あたりは、企業の保養所や個人の別荘、キャンプ場

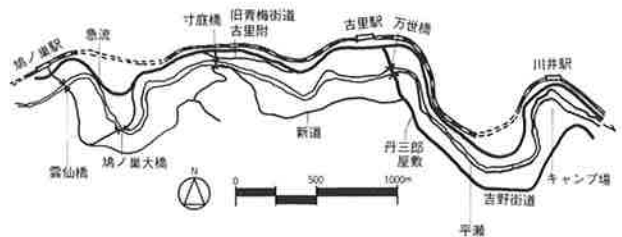
がほんのわずかな平場に川に身を乗り出すように建てられている。それとともに細流から生活排水の流入が見られ、遠景にはすばらしい渓谷美であるがゆえ不吉な予感さえする。このあたりを地上から見ると、新しい家がかなりの密度で建ち始めている。奥多摩には本当に平地がない。そのわずかばかりの平地はほとんど畑に使われていたのだが、新興住宅地を見るとすでにここが東京の住宅地となり始めているのではないかと思われる。奥多摩駅周辺の宅地で今、坪数十万円と聞く。そして年々申し込み者が増加の一途だとも聞いた。

鳩ノ巣から約1km下ったあたりは古里附と呼ばれる旧青梅街道筋に集落がある。約600mの古道だが、玉石積の畑や鉄の大釜に水をたたえた井戸、入川谷からのきれいな滝、ワサビ畑などがあって谷あいの集落の歴史がしのばれる。

古里の万世橋から川井までは広い谷底に平浅が続く。道路を歩いてる限りでは川の様子は分らない。まして吉野街道などは自動車とオートバイがひっきりなしに往来し、まわりの景色を楽しむ余裕すら感じない。万世橋から吉野街道を500m程歩くと右側に杉皮で屋根を葺いた美事な長屋門がある。丹三郎地区と呼ばれるこのあたりは、200年程昔から続いた原島家の一族の屋敷であり、すぐそばに丹三郎屋敷として開放されている。このあたりを治めた庄屋家主の豪邸である。

2月の青梅街道や吉野街道は山の北斜面や日影に残雪がみられる。毎年2月半ばに行われる青梅市民マラソンは今年24回目を迎え14,000人もの参加者のもとに行われた。青梅駅近くをスタートし30kmコースで川井駅の近くまで多摩川沿いを走る。梅も少しふくらんできて、マラソンにはちょうど良い時期なのかも知れない。それにしても青梅街道は選手、観客であふれんばかりであった。

案内図



財団からのお知らせ〈シンポジウムのご案内〉

～多摩源流祭と多摩源流シンポジウム～

多摩川の源流地域にある古い歴史の村、小菅村では3年前から若葉が芽吹き始める5月の3日と4日に多摩源流祭を開いてきました。祭の目的は村興しと清流を守る上下流交流です。今回は第4回で、新しい試みとして『多摩源流シンポジウム』が開催されます。多摩源流の水と緑を守り続けることは東京都民の責務でもあると言えるのではないのでしょうか。多摩源流祭で山村の人情に触れ、シンポジウムに参加して「源流の森と水のありかた」を考えてみませんか。

多摩源流祭

5月3日(木):前夜祭 / 5月4日(金):多摩源流祭
源流伝承の郷土芸能、大菩薩御光太鼓、大お松焼き、その他

多摩源流シンポジウム

『多摩源流の森と水を守る』

5月4日(金)午後1時～3時30分 / 小菅村公民館

(内容)

古老の語る多摩川の森と水

(稲場紀久雄: 下水文化研究会)

多摩川を守る流域住民の意識調査

(谷口尚弘: 東京都)

わが愛する多摩源流

(船木喜久郎: 元東京都水道局長)

源流の森と巨樹

(平岡忠夫: 巨樹の会)

多摩川: 治水、利水、環境を考える

(高橋裕: 芝浦工大)

源流水の聞き水、聞き酒、写真展、上下水道施設の見学会を併催の予定です。詳細は小菅村総務課多摩源流祭係まで。

電話(0428) 87-0201(代)

～まちづくりシンポジウム～

「狛江の水辺と緑を考えよう」

誰もが気になる狛江のまちづくり、今回は「水辺と緑」にテーマをしぼって、生活する立場から、自然保護の立場から、行政、専門家の知恵を持ち寄って意見交換します。言いつばなしの単発のシンポジウムで終わらせるのではなく、ふだんの公民館での活動、フィールドワークと連続した学び合いの場として位置づけます。

▶日時・会場

3月18日(日) 午後1時30分～4時

中央公民館 講座室

主 催 狛江市立中央公民館

T E L 488-4411

企画・運営 中央公民館のつどい実行委員会

▶プログラム

1. 講演「住民参加のまちづくり

～川とまちの共存をめざして～

講師 蓑茂寿太郎 (東京農大造園学科 助教授)

2. パネラーからひと言コメント

(敬称略)

各10分以内で

① 狛江市まちづくり青年会議

高橋清治 まちづくり答申の中から

② 狛江駅北口問題を考える市民の会

菅原征子 水と緑をどう生かすか

③ 多摩川の自然を守る会

柴田隆行 自然を学ぶ場としての多摩川

④ 野川に親しむ会

小山信子 野川のほitoriから

(フェンス、水辺の草刈など)

⑤ 狛江市都市整備部 山崎都市計画課長

「リブレイブシテこまえ」あれこれ

⑥ 建設省京浜工事事務所 篠崎河川環境課長

今までの意見発表に関連して

3. 会場との質疑応答

40分

コーディネーター 山道省三

特別寄稿

柴田 徳 衛 (東京経済大学教授)

『人・社会・地球』 半谷高久 共著 秋山紀子

化学同人発行 (TEL 075-592-6649) 1,600円
人間とは何か。起源をたどると生物一般にさかのぼる。では生物の起源は何か。こうして本書は地球、さらに宇宙そのものの起源へと150億年もさかのぼる。そこから宇宙、地球そして生物界を貫く大きな運行のシステムを説く。旧約聖書創世記当初の壮大な神様の事業——アダムとイヴの誕生を、最新の研究成果で語り直す形だ。

さてこうして誕生した人間がプロメテウスの火を手にしてからの長い年月。そこから見ればごく最近、技術革新で石炭、石油、原子力等を手にし

てきた。自然のシステムに従い、長らくそれに生かされてきた人間が、ごく最近、自然や資源を支配・乱費し、破壊し始めてきた。

本書後半で、地球温暖化、森林破壊、酸性雨、放射性物質汚染等のシステム破壊がなぜ起るか論じる。そして商品生産と利潤の極大を求め負の要因を取上げぬ経済学、水俣病のように自然経由の人身被害を前提としてこなかった法制度等にたいし、地球・生命の立場から本書は挑戦する。

従来学界はとかく自分の専門分野に蝟壺を握って籠り、過去の学説をより細分化し難解とすることに権威のより所を求めてきた。本書はそこにビッグバンの必要なことを突きつける。今後も本書の著者らは、経済や法律の現行のあり方や内容に即しつつ、ここで展開された科学論をもって、さらにいっそう批判と挑戦をし続けてもらいたい。

寄贈文献の紹介

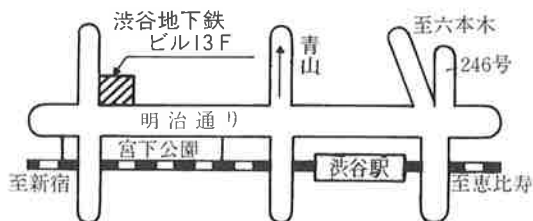
財団には多くの方々から多摩川に関する文献や自費出版されたものを送っていただいています。ここでは、最近お送りいただいたものをご紹介します。

- 「玉川上水と分水」 小坂克信著 (玉川と分水の会、TEL 03-233-4541) 1989年
(解説) 玉川上水と分水の歴史的経過やその意義が子供むけに分り易く解説されている。イラストや写真が豊富で親切な本である。
- 「川崎の紙漉—登戸付近—」 角田益信著 玉川製紙(株)発行 (TEL 044-911-2322) 限定千部 1989年
(解説) 明治から大正にかけて多摩川沿いの府中から二子にかけては多くの手漉き製紙業があった。その歴史を古文書をもとに詳しく紹介してある。著者の角田氏 (TEL 922-7593) は、「川崎の古民謡(上)、(昭61)、「稲

田堤の桜」(昭52)、「川崎の民俗」(昭54)も自費出版されている。

- 「TAMA・もうひとつの東京」 (財) 東京市町村自治調査会発行、TEL 0423-82-7722 (解説) 首都圏の拡大とともに多摩地域の様相は一変しつつある。その変貌の様子をまちづくりの視点で捉え直した新多摩地域論である。
- 「下水道文化」第1号・2号、下水道文化研究会編、TEL 03-263-4691 (日本下水道協会) 1988年
(解説) あまり知られていなかった下水道について日本をはじめ世界の事例研究を編集したもので、大変意義深い研究書であり、啓蒙書でもある。
- 「多摩川研究観察ガイドブック」 府中市自然調査団、TEL 0423-64-4111、1989年
(解説) 多摩川の歴史・文化・自然を分り易く解説したガイドブック、写真や図が豊富なハンディタイプとなっている。

- 発行日 平成2年3月1日
- 編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団 〒150 渋谷区渋谷1-16-14 (渋谷地下鉄ビル内) TEL (03)400-9142



*印刷所 雄文社 〒336 浦和市常盤9-11-1
TEL (048)831-8125